

トピックス

果樹カメムシ類の生態と 2024 年の多発生について

2024 年、果樹カメムシ類のフェロモントラップでの誘殺数が例年に比べ極めて多いことから、病虫害防除所（病虫害部）では情報発信による防除啓発を行った。卵巣の発達状況を調査した結果、夏季の高温の影響で例年より早く次世代が発生していることが多発要因の 1 つと推察された。

果樹カメムシ類とは

果樹カメムシ類とは、果樹の果実を加害するカメムシの総称で、チャバネアオカメムシ、ツヤアオカメムシ及びクサギカメムシが主要種に挙げられる(写真1)。いずれも様々な植物を吸汁し、ナシ、モモ、ビワ、ブドウなどの果樹類のみならず、ピーマンなどの果菜類も加害する。吸汁された果実は、被害部がスポンジ状となる、くぼみや着色異常を生じるなど、商品価値が大きく低下する(写真 2)。



写真1 果樹カメムシ類成虫（左からチャバネアオカメムシ、ツヤアオカメムシ、クサギカメムシ）

果樹カメムシ類の生態 ～果樹園では増えない！？～

果樹類に被害をもたらすため、「果樹カメムシ類」と称されるが、ほとんどの種は果樹園で繁殖することはない、主な繁殖源は、スギやヒノキの果実（球果）である。

春、これらの球果がまだ山林に実っていない時期は、越冬成虫（親世代）がサクラなどの植物を転々とする中で、果樹園に飛来し、ナシやモモ等の幼果を加害する。その後、夏から秋には、スギ・ヒノキの球果で子世代、孫世代が発生するが、増えすぎて餌不足に陥ると山林を離脱し、餌を求めて果樹園へ飛来することで収穫前の果実に被害をもたらす(図1)。スギ・ヒノキの結実量は年次較差が大きいので、果樹カメムシ類の繁殖量や果樹園への飛来量は大きく変動する。このように果樹カメムシ類は「ゲリラ的」に果樹園に飛来するため、「いつ」、「どれぐらい」飛来するのかを予測するのは極めて難しい。病虫害防除所では果樹カメムシ類の飛来量を早期に把握するため、予察灯やフェロモントラップを用いた発生調査を行い、情報発信を行っている。



写真2 果樹カメムシ類による果実被害（左：ナシ、右：ビワ）

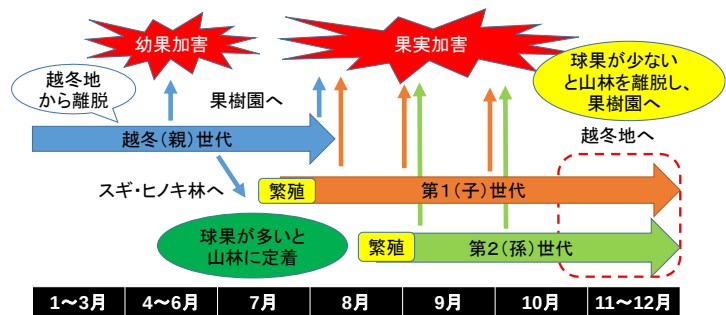


図1 果樹カメムシ類の1年（模式図）

2024 年の多発生について

2024 年は県下全域で過去に類を見ないほどの果樹カメムシ類の多発生年となった。加西市に設置したチャバネアオカメムシ用のフェロモントラップでは、4 月下旬から平年(過去 10 年平均)を大きく上回る個体が誘殺され、4～10 月の合計誘殺数は 14,627 頭と、平年の約 18 倍となった(図 2)。

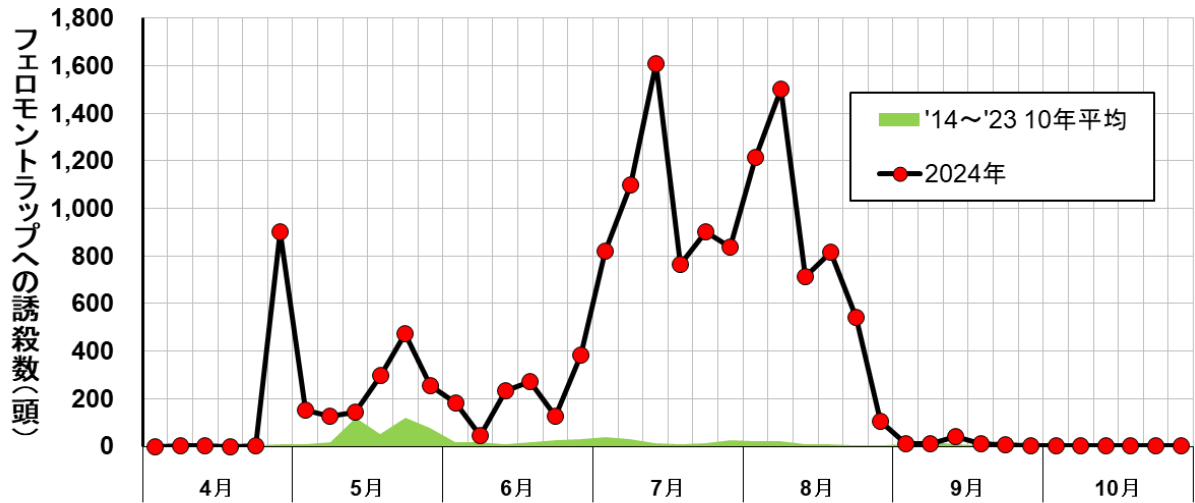


図2 フェロモントラップにおけるチャバネアオカメムシ誘殺数の推移 (加西市)

例年であれば7月下旬～8月上旬にフェロモントラップへの誘殺数が増加するが、これは越冬(親)世代に加えて子世代が飛来しているものとされてきた。2024 年は例年より早く 7 月上旬に誘殺数が急増したことから、誘殺個体を解剖し、卵巣の発達状況を調査することで、チャバネアオカメムシの世代推定を試みた。

その結果、7 月中旬の調査では、産卵期～卵巣が退化した親世代に混じって、卵巣が未発達の子世代が確認され、本年は例年より早くから子世代が

飛来していたことが伺えた(図 3)。その後、卵巣の発達が進んだ個体が増加して子世代が優占したが、8 月中旬以降の調査では、卵巣が未発達の個体が再び増加した。これらは孫世代と推察され、温度が高くなると本種の発育が促進されることから、夏季の高温により例年より早く世代が推移したことが多発要因の 1 つと推察される。

今後の展望

上述のように果樹カメムシ類は「神出鬼没」で園地に飛来するため、果実への加害を防ぐためには、果樹園への飛来を速やかに把握し、適期に薬剤散布を行うことが重要となる。病害虫部では現在、スマート機器を活用して日別・時間帯別の飛来量を省力的にリアルタイムで把握する取り組みを進めている。今後も引き続き、生産現場に速やかに情報発信ができるよう努めたい。

富原 工弥 (病害虫部)

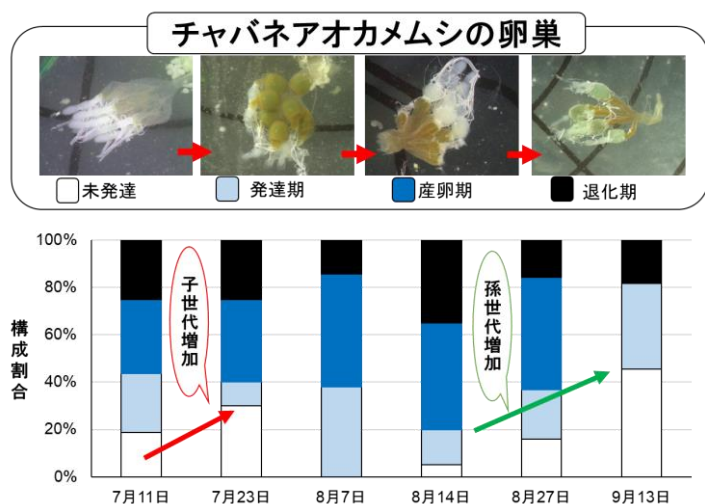


図3 フェロモントラップに誘殺されたチャバネアオカメムシ雌成虫の卵巣の発達程度 (各日ともに 20 個体を調査)